

名軍師

## 黒田官兵衛①

一龍斎貞花

講談師

今年の大河ドラマは「軍師 黒田官兵衛」戦国ものが人気とあってテーマに多く取り上げられます。秀吉の天下取りも、前半竹中半兵衛、後半黒田官兵衛という軍師あったればこそです。

播州の一部を領するのみの小大名で御着ごちやくの城主小寺政職まさもとは「これまで通り毛利につくか、新勢力織田信長と結ぶがよいか」優柔不断とあって家臣を集めて評議。

「信長が、中国へ軍を向ければ当家は真っ先に踏み潰されてしまう。今川、武田を破り足利幕府の勢力さえ奪った信長、悔ってはならん」「イヤ、たとえ織田の軍勢どれほどこようと、毛利の勢力は山陰・山陽十二か国に及び、瀬戸内の水軍も味方。いざの時は毛利に助勢を頼めば

よい」旧来通り毛利への意見が強かった。「あいや、ご一同」三十そこそこで家老職を務める黒田官兵衛が、「かねてより申しとおる通り、やがて織田が天下を握ることになりましようぞ。いかに毛利強大といえど、お家の安泰は織田をおいて外になし」「岐阜は遠い、大軍を動かすことは出来まい」

「織田家の疾風の如き行動ご存知なきか。某それがし、織田家へ参る」自ら織田家への使者をかって出た。

廻りは毛利へ与力する者ばかり。目立たぬようただ一騎にて、途中生家の姫路城へ寄り、母はもうこの世にないが父宗円そうえんにいとまを告げ、まだ若い妻と、8歳の松寿丸に久し振りに会った。「孝高よしたか、あとのことは心配するな。わしはこの城を守ってみせる。岐阜への道中を気をつけて行けよ」

父の言葉は、死を覚悟しての旅立ちになによりも心強かった。

後年壮大な城が築かれてから姫路城と呼ばれるようになるが、山陽と近畿のどの咽喉にあたる要害の地で当時は御着の本城を守るための一支城に過ぎず、堀も曲輪も簡単な建物で、樹木の多い丘の上に、十数年前から黒田という家族が住居を建てて住んだというに過ぎない程度のもものだったが、官兵衛という優れた息子によって隆々たる勢力と人望によって、30歳で家老職になり小寺家を支えていた。先祖は近江の名門佐々木氏の一族というが、目薬売りの浪人からのし上がったと

もいわれ定かでない。

水呑百姓の俵から天下人<sup>びと</sup>となった豊臣秀吉はじめ、地方の豪族から大々名になった人は少なくない。

今も新しい情報産業で地位を築いている人が少なくない。プロ野球は古い体質なのだが、近年は新聞、鉄道系は押されっ放し。勝海舟が「理屈は死んでいる。時代は生きている」といったが正にその通り。企業を継続し勝ち残っていかねばいけません。創意・工夫によってもっと大きく伸ばすことも出来ましょう。企業は生き物、戦国の世と思えばプラス思考で楽しんで下さい。町工場も、ロケットはもとより、ボブスレー、深海探査機と頑張っていますでしょ。

### 秀吉を介して信長に

信長に会うには、部将を通じた方がよかろう。譜代の宿老を鼻にかけ田舎者のわしなどあしらわれる心配もある。羽柴秀吉殿はどうだろう。今もって猿と呼びすてにする宿老があるというが、武勇の聞えはないが才覚でのし上がり、農民たちからも信頼されているという。播州にいる時から噂は耳にし、「小者から出世した人だけに苦勞がわかり、田舎者のわしの話聞いてくれるに違いない」

岐阜の城下の賑いに眼を見張った。信長の楽市楽座政策によって毎日が祭りのような賑い。官兵衛は木賃宿に泊って庶民の声を聞く。秀吉の評判は悪くない。それなりの武士ならば即信長に対面を申

し入れるであろうが、その城下の様子、庶民の声を聞くことの重要さ、真実を知ることが出来る。重役だけでなく社員の気持ち、声を聞いて下さい。

### 黒田官兵衛孝高にござります

「これはようお訪ね下された」すぐ座を立ち秀吉気さくに官兵衛の元え。「御辺の噂はかねてから聞いておる。姫路の官兵衛殿は将来ある有為な者と、摂津の荒木村重などからも聞き及んでいる。わざわざ岐阜までようお越し下された」旧知のような口吻<sup>くちぶり</sup>に態度、流石人たらしの人です。「30歳か。わしは9つ上じゃ。ここにおる竹中半兵衛は2つ上、お身とならば必ず肝胆相照らすものがある。勿<sup>ふ</sup>頸<sup>けい</sup>を誓ったがよいぞ」「あなたが竹中殿で…。何卒ご指導下さい」「なにを申されます。手前こそお願い致します」秀吉が三顧の礼で迎えた竹中半兵衛。秀吉の天下取りに大いなる助力した半兵衛と官兵衛の出会いでありました。秀吉の案内<sup>あな</sup>により信長に謁見<sup>えっけん</sup>。

「そちが隨身のしるしに」と「庄切<sup>へしきり</sup>」の名刀を拝領。ところが、主人政職が毛利へ変心。さらに信長が信頼する荒木村重の裏切り「かねてから知己の村重、某<sup>それがし</sup>翻意<sup>ほんい</sup>をうながします」と摂津へ。ところが荒木のため官兵衛は土牢に幽閉の身となるお話は、次回に。